

沖縄、人生創造、教育・生活指導・ワークショップ

——研究の第二次中間総括（2002～2020年刊行の文献の自己解題の形で）——

浅野誠

目次

はじめに 前著の紹介

本著のはじめに

- 1) 授業・ワークショップ論I（2002～2010年）
- 2) 生活指導論（2002～2020年）
- 3) 人生創造論I（2002～2013年）
- 4) 大学教育論（2002～2015年）
- 5) 沖縄論I（2005～2011年）
- 6) グローバル教育・多文化教育（2002～2012年）
- 7) 書籍・雑誌中心から、ブログ・ホームページ中心へ
- 8) 授業・ワークショップ論II（2007年～）
- 9) 旅の中での世界発見（2007～2018年）
- 10) 教育論（2007～2015年）
- 11) 社会・芸術（2007～2017年）
- 12) 生活・健康（2003年～）
- 13) 人生創造論II（2013年～）
- 14) 沖縄論II（2012年～）
- 15) 南城論（2007年～）
- 16) 自然（2007年～）

はじめに 前著の紹介

私は、「生活指導、沖縄教育、大学教育、授業・ワークショップ、グローバル教育——研究の中間総括（文献自己解題の形で）——」（『中京大学教養論叢』43巻3号2002年所収 以後、「前著」と記す）というものを公開した。

その冒頭に、次のように書いた。

私は、2003年3月、勤務先の中京大学の退職という形で、研究生生活のありように一つの大きな区切りをつける。大学院時代からを含めれば、1969年から2002年までの約33年間私がしてきたことの中心の一つは研究であった。この退職は研究生生活の終了ではなく、新たな研究生生活のステージに入ることを意味する。2003年以降の人生計画は、本稿執筆中の2002年夏現在作成中である。その計画作成の基礎作業の意味をも含めて、この33年間の研究についての中間総括を行うことが、本稿の主題である。

これまでの30年は、実践と研究の二つの比率ということでは、70年代では、60%対40%というほどのものであった。少しずつ後者の比重が高くなってきたが、00年代の今日でも、その比率は40%対60%というものであろう。そうした意味では、これまで走りながら考えてきた、ないしは走った後で考えた、という性格が濃厚であった。大学教育論などはその典型である。

その意味では、走ってきたが、まだ「考えていない」ことが多く残されており、考える作業が必要なものが多い。その考える作業をこれから数年かけて展開する必要があるだろう。と同時に、走りながら考えるというのが私のスタイルでもあるので、今後も走る必要がある。だが、私の「走り方」には軽率さがつきまといがちであったので、これからは、「走る」というよりも「歩む」でいきたい。

この研究の中間総括の一つの方法として、執筆文献の自己解題という形をとることにする。そのことで、広汎な関連研究の方々の智恵を得たいからである。

以下の叙述は、生活指導、沖縄教育、大学教育、授業・ワークショップ、グローバル教育とこれまで行ってきた研究の領域毎に、いくつかの時期に分けた章構成ですすめていく。

各章末に文献リストを付した。執筆した文献は総合計すれば、約500になるが、煩雑さを避けるために、学会などでの口頭発表、研究会の分科会の討論報告、共同調査研究などでの経過報告的なもの、新聞掲載物、座談会記録、書評、実践分析、事典項目執筆などは割愛し、227点を掲載した。割愛したもののなかで、重要性があると思われるものは、本文中で提示した。

文献の前に記した番号は、公刊時期順ではなく、執筆時期順による通し番号である。同一時期でも、研究領域ごとに章構成したので、章内では番号がとび番号となることが多い。各文献は、タイトル、掲載誌・書籍名、発行者、発行年などの順である。

本著のはじめに

本著は、2002年に前著を公開した以降、2020年までに書いた文献のタイトルなどを掲載し、解題するものだ。だから前著の続編というべきものになろう。

前著は「研究の中間総括」という副題をつけたが、今回は「第二次中間総括」というものになろう。その次があってもいいはずだが、私の研究活動の先行きは、年齢もあり不透明なので、当然「第三次」も不透明になる。

第一次は、中京大学を退職する直前に発刊したのだが、第二次は、中京大学勤務の最終期から始まって、退職（いくつかの大学での非常勤講師を務めたが）し、生活拠点を沖縄に移し、「田舎暮らし」をする時期になる。大学などの非常勤講師をつとめ、各地で講演・ワークショップを持ち、居住地の南城市の委員会の仕事をいろいろと務める。そのなかで、研究分野はそれまでにない展開をみせ、執筆した領域も大きく変化していく。それらを並べると、タイトルにもした「沖縄、教育・生活指導・ワークショップ、人生創造」以外に、南城論、授業論、大学教育論、社会・芸術論、生活・健康論、グローバル教育、旅、自然、などとなる

専任職がないことと、2000年代に入って表面化した体調不良で、全国生活指導研究協議会（略称全生研）常任委員会代表など、役職のほとんどをおりたこともあって、時間的ゆとりが拡大し、まさに「研究者」的生活の比重が高まり、執筆量もそれ以前と比べれば増えたと言えるかもしれない。また、第7章に述べるブログに書いたものがかなりの量になり、400字詰め原稿用紙に換算すれば、年間1000枚を越す年が多い。

2003年から公開したホームページ、2007年から始めたブログを研究発表の場に活用したことがあって、公開

への制約が減って、執筆はより活性化し、分野も広がった。出版社、雑誌編集部、学会・研究会との調整などを必要とせず、書いたものを直ちにそのまま公開できるからである。といっても、2016年には70歳代に入り、体力的な制約も出始めた。それでも執筆上の制約が少ないので、なおしばらくは、執筆量現状維持が続きそうだ。

ただ、いまでは所属する研究諸組織が少なくなったので、原稿依頼が減少し、私自身が書きたいことを書く比率が高まってきており、依頼されて書く原稿は執筆全体量の2～3割となっている。

※ なお、ブログで書いた同一分野の論をまとめて編集し、ファイル化してホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」(<https://asaoki.jimdofree.com/>)に掲載した。このアドレスにアクセスして、希望ファイルを開く、あるいはダウンロードすることがフリーに（無料で）できる。それらは、この文献目録でもファイル名で記述し、文献番号に「フ」を付している。

本著で示す文献名の冒頭に示した番号は、前著から継続するものである。なお、前著同様、学会などでの口頭発表、研究会の分科会の討論報告、共同調査研究などでの経過報告的なもの、新聞掲載物、座談会記録、書評、実践分析、事典項目執筆、大学院生が主体となって執筆した共著論文など数十点は割愛した。したがって、本著に掲載したのは、228～337および追加1の111点である。

228 生活指導、沖縄教育、大学教育、授業・ワークショップ、グローバル教育——研究の中間総括（文献自己解題の形で）—— 『中京大学教養論叢』43巻3号2002年

1) 授業・ワークショップ論 I (2002～2010年)

90年代から私の研究の中心の一つに位置づいた授業・ワークショップ論については、大学教育論にかかわる仕事が増えたことが側面から促進作用を果たした。そしてグローバル教育をはじめとする世界的動向とからみ合おうとする研究姿勢もあいまって、00年代に入ってなお一層進展していく。

その研究作業は、理論が先行したというよりも、実際の授業ワークショップを展開することが先行して進んでいった。私が担当する授業、あるいは依頼されてかかわったワークショップを、実際にすすめることが軸になり、それらの実践が作り出した世界を後追いで理論化するという流れが中心だった。

90年代後半から2010年代半ばまでの私は、ワークショップをすることと、その準備のためにワークショップでするアクティビティ制作に、とても大きなやりがいをもって楽しんでいた。制作したアクティビティの数は、数百以上だろう。すでに実践したアクティビティも、参加者がかわるたびに、相手の状況に応じてアレンジし直したので、そうした改訂版を算入すれば、1000をはるかに越してしまうかもしれない。

そうしたワークショップおよびアクティビティを集約したものには、第3章人生創造で紹介するものも含めて、231、233、237、そして時期は少し後になるが、263、264、265、266、267がある。

そうしたワークショップ実践を受けて、ワークショップの意義・位置や注目点を考察した小論も書いた（246、254、前著所収の222）。

そしてワークショップをしようとする人のためのガイドになる入門書を、単行本として刊行した(253)。これは、「未来物語づくり」という高校生対象のワークショップの実例をもとに書いたもので、章立ては以下の通りだ。

第一章 ワークショップとのつきあい方

- 第二章 ワークショップ開始直後 30 分
- 第三章 場、道具の準備
- 第四章 コーディネイターになってみよう
- 第五章 ワークショッププログラムの作り方
- 第六章 ワークショップの進め方の知恵 困った時の対処

253 に引き続くものとして、263 を公開した。これは、その後 7 冊になるまで継続した「浅野誠ワークショップ」シリーズだが、その第一冊が 263 だ。章立てを紹介しておこう。

- 第一章 ワークショップの作り方 プログラム構成の仕方
- 第二章 ワークショップの進め方 開始・アイスブレイキング・ふりかえり
- 第三章 浅野誠ワークショップの風景・質問・感想
- 第四章 浅野誠ワークショップの色々

この時期に力を入れたワークショップの一つは、人間関係とかコミュニケーションとかにかかわるものだ。それは、ワークショップ導入で、参加者相互の関係を築いて、その後の活動への準備態勢をつくる（ウォーミングアップ、アイスブレイキングと言われる）という現実的必要があるからだけではない。

人間関係を作ることが苦手な子ども・若者が多いので、彼らが人間関係を築くことをサポートするきっかけとしてワークショップによるアプローチを試みるのが、重要課題として現実化してきたのは、この時期のことだった。そこで、私は、人間関係をつくる態勢・力量を高める、とくにコミュニケーション力量を高めるワークショップをつくり試みることを、この時期の一つの重点として展開したのである。

その一例が、〈でだうみっつ〉（「であう・だす・うける・みつける・つなぐ・つくる」の頭文字をならべたもの）を創作し、いろいろと試みた。233、239 はそれを紹介したものだ。

こうした試みの前史としては、1980 年代半ばに子どもの社会性発達にかかわる生活指導実践を提起したことがある。とくに障害をもつ子ども、幼児、低年齢期の子どもへの指導として構想したものである。それは、前著 82, 92, 99 などで提起したものである。

2000 年代半ば以降も、非常勤講師として担当した大学（中京大学、琉球大学、沖縄国際大学、沖縄県立看護大学、愛知教育大学、沖縄大学）および専門学校での授業では、こうしたものを多分に含んだものを展開した。わけても 2006 年からの専門学校である沖縄リハビリテーション福祉学院言語聴覚士の「対人援助とコミュニケーション」の授業は、そうしたもののオンパレードの授業となった。それはその後、患者への対応準備の基礎力量を含んだものに焦点化させつつ 2020 年まで続く。

また、特別支援教育にかかわっては、鳥取県白兎養護学校での職員対象の一日がかりのワークショップは、それ以降のこの種のワークショップの原型となった（264 所収）。項目を紹介しておこう。

- ・つながる・伝える
- ・物語る・やる気を出させる・誘う―断る
- ・いろいろな人を発見し、つながる
- ・共同創造へ
- ・発見を宝物へ

トロントにおける在外研究前後、ワークショップを格段とレベルアップするヒントを大量に得た。それにはワークショップのアイデアだけでなく、ワークショップのテーマにかかわるものもあった。多文化教育、開発教育、平和教育、未来教育、反差別教育、ジェンダー教育、自然とかかわる教育など、多方面へと広がっていく。

それらの多方面の分野でのワークショップの実際の展開については、263の末尾に一覧表を掲載した。

また、ほぼすべての担当授業をワークショップスタイルで展開したのだが、受講生が積極的に活動し、共同創造する授業をどのように作るかについてのワークショップの要請が全国各地から舞い込んだ。90年代までは、大学関係が中心であったが、00年代には高校教員などを対象にしたワークショップを展開した。印象に強く残っているのは、2006年の全国高校生活指導研究協議会の全国大会での授業づくりのワークショップである。レクチャ中心の一方的授業を変えて具体的手掛かりを全国の教師たちが求めていることを象徴するような場であった。その展開を紹介したのが、256である。

- 233 コミュニケーション〈でだうみつつ--であう・だす・うける・みつける・つなぐ・つくる〉・スキルを高める指導のためのワークショップ 中京大学教養論叢 44 巻 1 号中京大学教養部刊 2003 年
- 239 つなぐ・コミュニケーション・ワークショップ
『生活指導』2004 年 1 月号 全国生活指導研究協議会編集明治図書刊
- 246 NPO・ワークショップと生活指導実践 『生活指導』2005 年 4 月号
- 251 ワorkshop型実践のすすめ——教師対象ワークショップの一例 『生活指導』2006 年 1 月号
- 253 ワorkshopガイド アクアコーラル企画 2006 年
- 254 ワorkshop型授業へ 日本教育方法学会編『学習意欲を高める授業』図書文化 2006 年
- 256 生徒がのる授業——イメージとワザ 『高校生活指導』172 号 2007 年
- 257 共同の発見・創造としての学びを 『生活指導』2007 年 7 月号
- 263 浅野誠ワークショップ1 ワorkshopの作り方進め方 2010 年 自費出版
- 264 浅野誠ワークショップ2 人間関係を育てる 2010 年 自費出版
- 265 浅野誠ワークショップ3 授業づくり(小中高校) 2010 年 自費出版

2) 生活指導論(2002~2020年)

前著と本著に掲載した著作が示すように、私は研究分野を拡張し続けてきた。それでも、2010年ごろまでは、もともとの専攻分野としての生活指導を中心分野だと表明していた。1999年の在外研究の際に、前著の176,177で示した異質協同型集団づくりをさらに拡張し、前著XXで示した「生活指導論の新たなステージの探究」を、この時期も継続していた。232、238、240に示されるような主張をいろいろと展開していく。この連作の内容紹介として、章立てを紹介しておく。

1. 状況のとらえ方
2. 生活・生き方のありよう、人生創造・未来教育
3. <一九六〇年代型生活・生き方>
4. <一九六〇年代型生活・生き方>にかかわる生活指導実践

5. <一九六〇年代型生活・生き方>への問い
6. 1960年代型に代わる2000年代的生活・生き方探求に求められるもの
7. 2000年代型の追求
8. 2000年代型生活・生き方の探究——異化・発見・創造
9. 2000年代型生活・生き方の探究——共同・協同
10. 2000年代型生活・生き方の探究——参加
11. 2000年代型が求める生活指導——生き方の転換・創造を求める
12. 2000年代型が求める生活指導——標準像（モデル）ではなく、多様な探求のなかで
13. 2000年代型が求める生活指導——人生創造型
15. 2000年代型が求める生活指導——つなぐこと
16. 2000年代型が求める生活指導——つなぐことと組織
17. 2000年代型が求める生活指導——多様な結社とその指導
18. 2000年代型が求める生活指導——結社指導の展開
19. 2000年代型が求める生活指導——リーダーシップと指導の転換
20. 2000年代型が求める生活指導——その視野

さらに、全国各地で展開している新たな実践創造の芽を積極的に評価していく。235,247,249などがそうだ。

また、そうした営みの一つとして、人生創造とか生き方の指導とかいわれるものを生活指導実践の重要部分として復活することを提起した。というのは生活指導の理論と実践において、戦前から戦後20年間までは、「生き方の指導」としての生活指導が強調されていたから、その現代における再構築の提起を試みたからである。その中心に座るのは、243であり、次節で示すような人生創造ワークショップであった。243は生き方の指導を、関係性を自主的にどのように築くかに焦点をあわせて書いたが、章立ては次のとおりである。

序章 生き方の物語づくり

第一章 新たな生き方の創造の視点

第二章 生き方教育の多様な展開

第三章 子どもたちのつながりと組織

第四章 生き方教育の協同創造を

2000年代末になると、毎年参加していた日本生活指導学会も徐々に「時々参加」にとどまるようになり、生活指導についての総括的な語りが増えてくる。286はその一つである。三十数年にわたって、深い関わり合いを続けた全生研にも、この時期以降、参加・かかわりは依頼された小文を時々提供するにとどまるようになった。それらは短文なので、本リストには掲載していない。

生活指導論執筆が減少していく中で、334は全生研研究委員会集団づくりの探求部会の要請で、口頭提案したもののレジメである。要旨を示しておこう。

——1950年代末から80年代半ばの「右上がり」の時期に、集団づくりの実践と理論は、民主主義を軸にして、学校・学級を含め強力な組織をつくる思想・技術を形成してきた。それはかなり権威あるものになっていく。しかし、80年代以降表面化してくる「右上がりではない」社会状況・学校状況のなかで、それらの権威を相対化し、「違いをもちよって」作り出す異質協同的なありよう、学校・学級、そして社会のなかに多様な組織を生み出していく道を模索創造す

る実践と理論の探求が長期にわたって展開されていく。その中の一人として、私は歩んできた。――

学校における集団づくりを中心にした生活指導を歴史的に述べた334は、機会があれば文章化したい。できあがれば、かなりの長文になろう。

- 232 1960年代型生活指導から2000年代型生活指導へ 『生活指導』2003年4月号
- 235 船越勝・宮本誠貴・木村勝明・藤木祥史・谷尻治・植田一夫・浅井潤一郎・全生研近畿地区全国委員連絡会編『共同グループを育てる--今こそ、集団づくり』(2002年7月エッセイかもがわ刊)を検討する――2000年代型生活指導構想の一つの手がかりとして―― 中京大学教養論叢44巻2号2003年
- 236 新しいリーダー・リーダーシップ 『生活指導』2003年10月号
- 238 1960年代型生活指導から2000年代型生活指導へ その2 2000年代型生活・生き方の探求と2000年代型生活指導の追求 中京大学教養論叢44巻3号2003年
- 240 1960年代型生活指導から2000年代型生活指導へ その3 2000年代型が求める生活指導 中京大学教養論叢44巻4号2003年
- 241 足もとから創る――教師の協同 『生活指導』2004年3月号
- 243 〈生き方〉を創る教育 大月書店2004年
- 247 今日の生活指導実践への問題提起・提案 『沖縄国際大学人間福祉研究』4巻1号 沖縄国際大学2005年
- 249 生活指導創造に向けて新たな芽を育む 『生活指導』2005年10月号
- 268 多文化協同=異質協同型生活指導へ 日本生活指導学会『生活指導研究』28号 2011年
- 286 生活指導研究のこれまでとこれから 生活指導研究30号 2013年
- 334 生活指導実践の理論を構築することをめぐって、全生研が持ってきた多様な視野の歴史 個人体験を含めて 全生研集団づくりの探求部会 2020年

3) 人生創造論I (2002~2013年)

1990年代半ば、私個人の「人生後半期」の人生創造をどうするかについて考え始めたが、1990年代末には、多様な成人の生き方、そして若者の生き方を、多様なワークショップをとおして探究し始めた。

若者の生き方については、中京大学の新生を対象とする授業「基礎ゼミ」で数年かけて追求し、若者が自己の将来創造を考える多様なワークショップを作り出していった。中京大学だけでなく福島大学、さらに沖縄のいくつかの大学等でもワークショップを展開した。231,237はそれを示すものだ。それらを整理集約するものとして267がある。そして論文としては250、生活指導学会での口頭発表を文章化したものとして267末尾の「人生後半期以降の人生創造と生活指導実践」、さらに「なぜ人生創造ワークショップか」(276所収)、「社会創造・人生創造とワークショップ」(304所収)がある。

若者の生き方にかかわって、「ストレーター」という言葉を造語して、250で使用した。当時フリーター叩きが盛んにおこなわれたが、ひるがえって学校秩序に乗って就職まで「ストレート」で至る生き方を問う必要があるのではないか、ということ提起したものである。

成人を対象とするものでは、全生研大会の分科会などで、教師人生の生き方についてのワークショップ(241、252、267)、日本生活指導学会では、ワークショップ「人生創造」(267に所収)などを行った。参加者が自分自身に直接かか

わると感じているためか、熱心なかかわりがうまれるとともに、多様な人々とかかわる中で、大量の発見、共同創造がうまれてくるので、ワクワク感を生み出すものともなった。それらでは、共同で生き方・人生の物語を作り出すことを大切にしてきた。

私個人の人生創造を紹介したのは、255 である。章立てを紹介しておこう。

- 第一章 自然のなかで暮らす
- 第二章 植物たちとともに暮らす
- 第三章 暮らす
- 第四章 人々との出会い
- 第五章 人々とつながって暮らす
- 第六章 土地探し・建物建築
- 第七章 移住と人生創造
- 第八章 人生創造とスローライフ

2010 年代前半に執筆したものは、1) 人生創造・人生おこし、2) 若者の生き方、3) 人生後半期の3つに分けられるが、2) 3) が圧倒的に多い。

272,273,275,277,279,281 は、2) にかかわるものである。若者の生き方にかかわることが、ニート・フリーターなどという形で話題になるにとどまらず、具体的な取り組みの蓄積が進む時期に、それらの問題に、私なりの発信をした論稿である。281 は、いくつもの小論の他に多くの若者から聴いた話をもとに「小説」風に創作したものを含んでいる。

3) について書いたのは、292,294,296 であるが、1990 年代末から追求し始めた人生後半期の生き方追求を、私自身の模索に合わせて、老人期・スローライフなどに焦点を絞りを始めた論稿である。

- 231 ワークショップ「人生創造を考える」 中京大学教養論叢 43 巻4号 2002 年
- 237 『人生創造』ワークショップ 中京大学教養論叢 44 巻3号 2003 年
- 250 「ストレーター」秩序を超えて、若者の〈生き方〉を創る教育へ向かうには
——フリーター・ニート論議とかかわらせて—— 中京大学『教養論叢』46 巻3号 2005 年
- 252 教師にとっての人生後半期の生き方 『生活指導』2005 年2月号
- 255 沖縄田舎暮らし——自然・人々とつながる人生創造—— アクアコーラル企画 2007 年
- 267 浅野誠ワークショップ5 人生創造 2010 年 自費出版
- 272 (特集「今、大学へ行く意味を問う」) 「人生創造=人生おこし」のなかで 高校生活指導No.192 2012 年
- 273 「人生おこし」の時代——モノ・コト・ヒトとのつながりを充実させるなかで
秘書サービス接遇教育学会「ヒューマンスキル教育研究」20 号西文社 2012 年
- 275 フ 若者の生き方シリーズ1 若者の人間関係・大人の若者への対し方 2012 年
- 277 フ 若者の生き方シリーズ2 学ぶ・働く・お金・文化スポーツ・旅移住 2012 年
- 279 フ 若者の生き方シリーズ3 進路創造・仕事 2012 年
- 281 フ 若者の生き方シリーズ4 若者の人生創造 2013 年
- 292 フ 人生・生き方シリーズ1. 人生後半期の人生創造 2013 年
- 294 フ 人生・生き方シリーズ2. 人間関係・家族・移住・多文化 2013 年
- 296 フ 人生・生き方シリーズ3. 社会のあり方と生き方—スローライフ— 2013 年

4) 大学教育論 (2002～2015年)

前著 226『授業のワザ一挙公開』以降も、全国各地の大学にでかけて、授業づくりワークショップを大学教員対象に持つことが、2010年代前半まで続いた。若年人口減少に伴う大学サバイバル時代が到来するとともに、文教行政は、大学教育への統制を強力におしすすめてきた。そのなかで、いやおうなしに授業を軸とする教育実践の質を高める必要があるという認識が大学人の中に広がってくる。

と同時に、こうした大学教育をめぐる状況変化に対して、問題提起することが求められるようになり、いくつかの論文を書いたのもこの時期である (229, 248)。そして、各地の大学で行なうワークショップの紹介も、いろいろなところに書いた (234, 242, 244, 245)。

こうしたものを集約するものとして、266を制作した。その章立てを紹介しておこう。

- No.1 大学授業とFDのここ10年 (小論)
- No.2～3 授業づくりワークショップ例
- No.4～5 授業改善アイデア・ワザの事例集
- No.6～8 私の授業例
- No.9 学生がのる授業へのワザとリクツ (小論)

260,261は、すでに退会していた日本教育方法学会から依頼されたものである。こうした本を日本語だけでなく英語でも出版することは、日本の理論と実践を世界に紹介するという前例が少なく意義深いので、積極的に協力した。

306は、この時期の大学にかかわる諸論を集約したものだ。そのなかで数回以上にわたって連載したもののタイトルを紹介しておこう。

- 新しい大学・成人教育を探そう (5回連載)
- 大学と学生とのマッチ、ミスマッチ (5回連載)
- 山里勝己「琉大物語」を読む (5回連載)
- 学生と大学 (5回連載)
- 新しい「狭き門」 大学入学への問題 (3回連載)
- 文科省「大学改革実行プラン」(13回連載)
- 大学の授業環境 (6回連載)
- 大学授業の小ワザ (6回連載)
- 大学改革の方向 (4回連載)

- 229 これまでにない大学づくりの本流としての〈参加〉 『大学と教育』34(東海高等教育研究所) 2003年
- 234 大学授業づくりワークショップ 中京大学教養論叢44巻1号2003年
- 242 大学における授業づくりワークショップ 『教育』2004年4月号
- 244 講義を変える「入り口」編 四ヶ条 『化学』2004年10月号(化学同人社)
- 245 授業を動詞にして学生たちが動く授業にする 『ビジネス系検定就職指導ニュース』第一号2004年

- 「世の中」の現実とからめる 同前第二号 2005 年
 学生の見方を変える 同前第三号 2005 年
 248 大学授業改革の現段階と課題 東海高等教育研究所『大学と教育』40号 2005 年
 260 大学における授業の研究
 日本教育方法学会『日本の授業研究』上巻『授業研究の歴史と教師教育』学文社 2009 年
 261 Lesson Study in Japan Chap.8(1) Improving Lesson in University
 National Association for the Study of Educational Method Keisuisha 2011
 266 浅野誠ワークショップ4 授業づくり(大学) 2010 年 自費出版
 306 フ 大学2007～2013年 2015 年

5) 沖縄論 I (2005～2011年)

2000年代までは、沖縄の教育界のいくつかの研究会とも定期的につきあっていた。その出会いの中でまず書いたのが249である。1990年初めまでの状況とは大きく変化したことへの「驚き」めいたものを書いた。その驚きの中心は、1980年代に広がり始めた「学校の点数中心」で自分の人生を構想するありよう(それを私はストレーターと名付けたが)が、ごく普通のありようになったことである。それからはずされた子どもたちも含めて、いじめや不登校がごく普通にみられる現象になった。

そうしたありようを、2000年代から始まる全国学力テストにおける順位争いに、教育課題を焦点化する動向が一層強まっていく。そうしたありように「驚き」を感じたのだ。

249は、気づいたそうしたありようを第一印象的に描いたものである。2000年代後半には、249以外に、新聞紙上やシンポジウムなどでいろいろと発言を続けた。そうしたものを集約する形で、2009年後半から2010年初めにかけて『沖縄タイムス』紙上に、「沖縄おこし 人生おこし」として長期連載記事を書いた。

それを受けて、さらに掘り下げ膨らませ、270を執筆した。その章立ては、次の通りである。

序 教育が人生おこし沖縄おこしになっているか

- 1 子ども若者の学習と人生
- 2 親と学校
- 3 沖縄おこしの教育へ
- 4 人生おこしの教育へ
- 5 これからの教育への提案

269は、予定していた執筆担当者が都合で書けなくなり、ピンチヒッターで執筆したものである。1976年から1990年まで十数年間生活した西原町の「復帰」以後の教育史であり、私自身の振り返りの意味もあって、楽しい仕事になった。

- 249 こじんまり、先を見通した論議の弱さ、企業社会＝「ストレーター秩序」から抜け出するためのいくつかの提案
 ——今日の沖縄教育の直感的印象＝私の長期作業への踏み台——『おきなわの子どもと教育』86号 2005 年
 269 第四節「文教のまち西原」へ 西原町史第1巻通史編II 2011 年

6) グローバル教育・多文化教育 (2002～2012年)

トロントでの在外研究の折の出会いの一つに、ホリスティック教育の動向がある。日本でも中心的に活躍しておられる方々と懇意になり、その方々からの依頼で書いたものが230である。

2007年8月、アメラジアン・スクール・イン・オキナワの窮状を打開するためということで、同校の校長職を引き受けた。米軍関係者を中心とするアメリカ人と沖縄人を親に持つ子どもたちを主対象として設立された学校(日本の学校制度でいうと、小中学校に相当)であり、英語を主言語、日本語を第二言語とするバイリンガル教育を展開し、注目すべき教育を展開していた。教員は、各学年を担当するアメリカ人が多く、日本人は日本語教育を担っていたが、ボランティアが支える面が大きかった。

独創的であるが、それだけに難しさもある学校運営だったが、多様な活動を展開していった。当初から体力上の問題を抱えていたので、勤務時間を限定して就任し、それなりの成果をあげ、学校の窮状を打開することができたが、大変な仕事だけに限定枠を超えて勤務し、再び体調不良となり、1年余りで退任した。

その間の学校の取組みを、私なりの視点で、ブログに掲載した。退職後、それを単行本化する作業が完成した際に、学校運営の主力者から異議が出て、結局は出版できなかった。

そうしたことはあったが、いくつかの論文などにその経験を反映させた。258,259がそうである。

その後も、多文化教育を含んで、世界的なものを視野に入れて活動することは、少しずつではあるが継続していく。

305は、異質協同・多文化にかかわる諸論を収録したものである。主な記事を示しておこう。

異質と同質(共通・共有) 異質協同研究ノート 多民族共生教育フォーラム2007東京——参加してのメモ
村上呂里『日本ベトナム比較言語教育史——沖縄から多言語社会を望む』を読む(9回連載) どこまでのバイリンガル能力を獲得させたらいいのか 馬淵仁編著『「多文化共生」は可能か』を読む(13回連載)

230 グローバル教育 日本ホリスティック教育協会『ホリスティック教育ガイドブック』(せせらぎ出版)2002年

258 アメラジアンスクール・イン・オキナワの教育活動の特徴——新人校長の試行錯誤のなかで見つけたこと
アメラジアンスクール創立10周年記念誌2008年

259 (久留島理夫と共著) アメラジアンスクール・イン・オキナワ 『生活指導』3月号 2009年

262 平和・多文化への知的追求と行動を育む——地元の沖縄戦・アメラジアンスクールを素材に考える——
『生活指導』10月号 2009年

305 フ 異質協同・多文化 2003～2012年 2015年

7) 書籍・雑誌中心から、ブログ・ホームページ中心へ

2000年代から2010年代初めにかけて、文章発表の媒体が大きく変化した。研究会・学会の機関誌や単行本を主舞台に発表してきたものを、私個人のブログ、ホームページを主舞台にするものに変化させたのだ。

その理由には、私個人を越えた社会的事情によるものと、私個人の事情とが重なっている。この時期に、退会したも

の、退会してはいないがほとんど出席しない研究会が増えたという私個人の事情、そして書籍、ことに私が書くような専門書の販売不振がきわまり、一冊の販売部数が1000にも達せず出版社が専門書出版からひいてしまい、あえて出版するなら自費出版にするしかないという社会的事情である。専門雑誌にしても、一般の出版社が扱い、書店にも並ぶようなものは激減した。こうしたなか、大学の、ないしは大学を経由する補助金をあてにして公開するものの比重が増えてきたが、大学に所属していない私には、その機会はなかった。

こうした事情の象徴的なものとして、263～267がある。私が作成してプリントアウトしたものを印刷会社で、印刷製本してもらい、私個人が販売するという自費出版形式をとったのである。出版社を通していないので、出版とはいえないかもしれない。自家本というべきだろう。

「本著のはじめに」でも触れたが、私は2007年にブログを始めた。2003年に始めたホームページも、ブログ投稿へと徐々に切り替えていった。そして、2012年には、新しいホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」を始め、ブログ記事をテーマごとに集約編集し、ファイルにしてそこに掲載した。本論のリストでは、それらの通し番号の後に「フ」を付した。そのファイルは、フリーに閲覧・ダウンロードができるので、私流の電子出版を始めたというわけだ。その前の2012年初頭に、ある会社を通して、電子出版で一冊(271)を出したが、ほとんど売れなかった。小さなサイトなので、やむをえないこともあるが、手間をかけて外部依頼するよりも自分でやったほうが、手取り早いと感じた。それ以降は、もっぱら、私流の形でやってきて、すでに数十冊になっている。

一つのテーマに、ブログに書いた関連記事を集約するが、ブログ掲載時期とホームページ掲載時期の間には、およそ数年の時間差がある。そのため、フを付した文献については、発行年より数年前、時には10年近く前のブログ記事を含むことになるので、各節の期間表示も何年かさかのぼるものとなっている。

また、ブログ記事なので、論文風のをふくむのではあるが、随想風のもの比重が高くなる。読者対象を研究者に限定せず、幅広い方々に読んでいただくということで、そうなるのである。

こんななかで、西原町史に執筆したが、市町村が発刊するというスタイルのもので出てきた。2010年代後半になって、私の執筆作業のなかでかなりの比重を占めるようになった南城市史も、そうである。

8) 授業・ワークショップ論Ⅱ (2007年～)

263～267は、前述したように自家本シリーズであり、大学授業のテキストにすることもあったし、各地のワークショップで使用することもあった。シリーズ続編である276、304は、もっぱら大学授業のテキストにすることを考えて作成した。

この時期の私は、以前同様にワークショップを「生きがい」にしていたが、非常勤講師の定年制をつくっている大学が多く、それを超えた年齢の関係で、大学授業の担当コマ数が激減していく。それでも、300ページ近く分厚い307は、大学など各地でのワークショップの実際をファイル化したものである。これらのファイルに収録した2010年代での担当科目は、琉球大学「特別活動の研究」、沖縄大学「生徒指導論」「教職論」「専門演習」「問題発見演習」、沖縄県立看護大学「教育学」「教育原論」、沖縄リハビリテーション福祉学院「対人援助とコミュニケーション」などだが、2000年代の沖縄国際大学、愛知教育大学大学院などの授業も含んでいる。

その他にも、学童クラブ支援員(指導員)対象のワークショップ、保育園での保育士対象のワークショップ、学校教員対象のワークショップ、沖縄県中小企業家同友会の同友会大学でのワークショップ、さらにはシュガーホールでの運営と方向性にかかわるワークショップ、読谷村社会教育団体合同研修会でのワークショップなど、多彩なものである。

このように、子どもや学校に限らない多様な分野で多様な参加者のワークショップを展開していく。2020年には、南城市『こどものまち』宣言策定のための何回にもわたるワークショップを大人だけでなく子どもたちの参加を得て進めていくことに深くかかわる。

なお、文献リストには加えなかったが、2018年2月18日に開かれた「人は、なぜ学ぶのか。どう学ぶのか。」というシンポジウムは、大変興味深いものだが、私も一人のシンポジストとして参加した。その記録が、企画運営にあたった企画組織『いろんな場所で生まれる美術』が発刊（2020年3月）している。

329は、依頼されて書いたもので、久々のワークショップ論執筆となった。

- 276 浅野誠ワークショップNo.6 人間関係・人生創造・世界発見・共同活動創造 2012年
 304 浅野誠ワークショップシリーズNo.7 楽しいワークショップ 2015年
 307 フ 授業・ワークショップ 2007～2014年 2016年
 329 ファシリテーションとワークショップ 『教育』2019年8月号

9) 旅の中での世界発見（2007～2018年）

2000年代初めまでの愛知生活では、仕事で全国各地を回り、90年代後半からは海外に出かけることも多かった。時間に余裕がある時には、旅先の周辺見学などをしていたが、付随的なものだった。

海外でいうと、数回にわたるカナダ訪問は、前著ですでに触れておいた。そのほかでは、1990年代後半の2回のネパール、2000年のジュネーブ、2003年のタイなどの訪問については、記録に残したものが少なかった。

ところが、2000年代半ば以降は、時間的にも精神的にもゆとりがでてきて、仕事とのかかわりなしに、旅自体を目的するものが増えた。それらの訪問記を写真と共にブログ掲載し、それをもとにファイル化するようになった。

それらの記録を集約したものが、下記の一覧である。そして、2017年のニュージーランド旅、2018年の山陰の旅があるが、ファイル化はまだである。

このなかで、フィンランドは、各2～3週間の2回の訪問であり、二度目は、研究費補助金も得た共同研究となり、インタビューを多くの方々に行い、小文を連ねた。それらを集約したものが298である。学校と仕事との関係に中心焦点をあて、ヘルシンキ周辺での教育界産業界の人々を対象にしたインタビューをもとにするものが多い。

- 284 フ 旅シリーズ1. 沖縄各地2007～2010年 2013年
 293 フ 旅シリーズ2. 台湾（2009年）・バリ（2012年） 2013年
 295 フ 旅シリーズ3. フィンランド（2010年、2011年）付エストニア・スウェーデン 2013年
 297 フ 旅シリーズ4. 全国各地2003～2013年 2014年
 298 フ フィンランドの教育と仕事2009～2012年 2014年
 323 フ 旅・お出かけシリーズ5 沖縄各地2010年～2013年 2018年
 324 フ 旅・お出かけシリーズ6 沖縄各地2013～18年 2018年

10) 教育論 (2007～2015年)

関心分野の広がりの中、教育分野での執筆量の比重が下がっていく。それでも、ブログの中で教育の多様な問題について書く。特にこの時期の沖縄で社会的関心の高まりをみせた学力問題・学力テスト問題にかかわるものが目立つ。

300 では、2007～2013年の教育関連記事を、「子ども・子育て」「学校・指導」「生活指導学会・全生研・高生研」「学力・授業」の4つに分類して掲載した。

301 では、タイトルにかかわるいくつかの小記事だけでなく、「教育の二つの顔」というタイトルでの14回連載、「PISA から見る、できる国・頑張る国」という OECD の本についての細かいコメントを30回連載で、「現代アメリカ教育ハンドブック」へのコメントを6回連載で、「世界の学力マップ」へのコメントを5回連載で掲載した。そのころの世界動向について書きつつ、日本の教育について考えるものとなっている。

311 は、2013年以前の教育関連記事のなかで、290,298,300,301 に未収録のものに掲載に加えて、2014～2015年の教育関連記事を収録したものである。「教育全般」「生活指導学会」「学童クラブ」「沖縄の教育」の項目に分けて編集した。記事の中に、かなり力を入れた連載が含まれているので、紹介しておこう。

「標準多様独創」2012年 12回連載

「生活研究と生活指導研究との共通性」2012年 6回連載

「中内敏夫『生活訓練論第一歩』を読む」2009年 7回連載

「沖縄教育の課題」2014年 45回連載

「『沖縄県の教育史』の加筆必要点」2013年 8回連載

このなかで、「沖縄教育の課題」は、この時点での私の沖縄教育論というべきものである。2010年代前半に頻繁に行ったワークショップの活動の一つに、「沖縄の教育は先進国型か、発展途上国型か、沖縄独自型か」というテーマで、全参加者が自分の考えをもとにグループに分かれ、討論するものがある。大学生からベテラン社会人までを対象に多用したが、いつも、この三つ、ないしはそれらの中間に見事にとりわけ分かれ、興味深い意見が出され、討論が途切れることがない。表向きには、「沖縄の教育は本土に遅れているから、早く追いつこう」という考えが支配的のように見られたが、実際はそうでもないのだ。それにしても、沖縄の教育を考えることが日常的には少なすぎ、行政関係者教育関係者にお任せしてしまっている人が多いようだ。こんな討論をきっかけに、考えを深めてもらいたい、と思って展開したワークショップなのだ。それらの経験を含んで、私なりに考えを深めていった一つが、この連載「沖縄教育の課題」である。

連載した中内敏夫さんの著作には、教科外教育をめぐる私の論文への言及が含まれており、今後の私の研究の深化への期待が語られている。しかし、私はいまだに適切な返答をせずにいる状態が長期に続いている。その源は、1983年の中内さんのグループとの共同作業（前著文献92参照）のころに発する。いつか、返答できるようにしたいと思うが。ちなみに、私の問題提起に真正面からコメントをしてくださったのは、中内さんだけという印象だ。嬉しくもあり、全般的には「無視」状態が続いてきたのを寂しく思うが。

300 フ 子ども・子育て・教育 2007～2013年 2014年

301 フ 教育理論・世界の教育 2009～2013年 2014年

311 フ 教育 2008～2015年 2017年

11) 社会・芸術（2007～2017年）

ブログでは、日常の人々との出会い・書籍を通して眼にすること、あるいは関心事について考えたことをもとにして記事に書いていく。それらを種別に集約してファイル化し、ホームページに掲載する。したがって、私が焦点化して作業していることだけでなく、それを超えて多様な分野が対象となる。ここでは、その多様な分野についてのファイルを紹介していこう。

299 は、音楽ホールとして著名になってきたシュガーホール（南城市文化センター）での音楽が中心になる。そのころ、長期にわたってシュガーホール運営審議会の会長・副会長の役割を務めていた。それは、かつての琉球大学同僚の中村透が芸術監督などとして、同ホールの創設発展に力を尽くしていたことがかかわっている。そこでは、かれの得意分野であるオペラ・ミュージカルの創作・演奏が積みかさねられてきた。ということで、超音痴である私も、深いかわりを持ってきたのである。そのかわりのなかで考えた諸小論も、同書には含まれている。

299 には、他にも、私が住む中山で生まれた中山合唱団の話題も含まれている。そして、こんな音楽と沖縄とのかかわりが積み重なって、沖縄県立芸術大学大学院博士課程を対象にした「芸術表現総合比較研究」の授業の話も含めた。それは、沖縄音楽教育史にかかわるものである。その内容については、先に掲載した 288 に、「沖縄音楽教育史」22 回連載で収録してある。

南城市では、00 年代後半から 10 年代前半まで、地元の工芸作家による半島芸術祭 in 南城が毎年開かれていた。それにかかわる記事を含めて、美術工芸にかかわる記事も 299 にたくさん収録した。

なお、これらについては、後出する 274 の 2 にも関連記事があるので参照されたい。

302 は、政治経済社会にかかわるものだが、書籍を読んだコメントが多い。読書生活の中で強い印象を与えた書籍を連載で紹介コメントした。それらの書籍をいくつかあげておこう。

羽場久美子「グローバル時代のアジア地域統合」

広井良典「創造的福祉社会」

岩波新書「日本の近現代史をどう見るか」

ベック「ナショナリズムの超克」

神野直彦『「分かち合い」の経済学』

バウマン「コミュニティ」

広井良典「コミュニティを問い直す」

302 の後継としての 317 は、302 同様、多岐にわたる記事を含んでいるが、302 同様、書籍紹介コメントが多い。いくつか紹介しておこう。

伊豫谷登士翁ほか「コミュニティを再考する」

長谷川裕ほか「格差社会における家族の生活・子育て・教育と新たな困難」

広井良典「ポスト資本主義」

広井良典「人口減少社会という希望」

ダワーほか「転換期の日本へ」

講座ケア第一巻「ケアとは何だろうか」

宇野重規ほか「デモクラシーの擁護」

- 299 フ 音楽芸能・美術工芸 2007～2013年 2014年
 302 フ 政治経済社会 2007～2013年 2014年
 317 フ 地域おこし これからの社会・世界 2013～2017年 2018年

1 2) 生活・健康 (2003年～)

私自身の日常生活にかかわる多様な分野についての小文を集録したものだ。

308 は、私の日常生活を、2000 年代後半から 2010 年代前半にかけての出会い・集いに焦点化して書いた記事を収録した。記事例を紹介しておこう。

中山海岸清掃 「島や宝」コンサート相談会 (近隣に住む宮本亜門さんの呼びかけ) たまぐすくユンタク
 中山合唱団 奥武ハーリー キジムナーフェスタ 教科書検定県民集会 ニューカレドニア訪問団との交流
 中山豊年祭 半島芸術祭 in 南城 卒業生来宅 修学旅行民泊受け入れ フィンドホーン久高島ワークショ
 ップ カラーセラピー 加藤彰彦さんと私 結婚披露宴 移住者ユンタク 南城市オープンガーデン
 アフリカ音楽鑑賞会

振り返れば、実にいろいろなことをして、いろいろな出会いをしたものと感じる。

312 と 313 は、308 に続くものだ。量が多いので、2つに分けた。同様に、記事例を紹介しておこう。

- 312 世界のウチナーンチュ大会 台風で甕がこわれてメダカ全滅 卓球大会記録 台風の後片付け 補聴器
 沖展 散策 孫たち 老眼鏡 コンピュータ
 313 薬用酒づくり 自家生産のコーヒー 家電修理 ヤモリとクーラー 年末年始通信
 我が家のエコロジー生活 (8回連載) 太陽光発電装置設置 (4回連載) 老前整理 流域地図
 近隣発見散策 (連載8回) 大雨 国道工事 中山ジーハンタ

309 と 330 は、私自身のことを中心に健康・身体・スポーツのことを書いた記事を集約した。2000 年代前半、私の身体はボトム状態で、そこから這い上がるためにいろいろなことをした。最大のことは沖縄移住だ。2000 年代後半以降、徐々によくなっていき、生まれて以降で最も健康だと言える状態に達したのは 2010 年代のことだ。

2007 年に始めたブログ以前に 2003 年に始めたホームページがあるが、そこにも関連記事は多く、309 はそれらを含んでいる。

では、記事例を紹介しておこう。

- 309 緊張とゆるめること ひげ物語 (2000 年代、ひげを伸ばした期間があり、「仙人」といわれたりもした)
 私の「ハートチャクラ」 死の教育 聖地と王朝支配 玉友クラブ (再開した卓球で参加したクラブ)
 看護大学生が作った健康マップ 病は体のバロメーター 「打ち克つ」より「なんくるないさー」
 働き過ぎからの卒業 マッサージ 逆流性食道炎 私の健康管理ノート 痰をとるハーブ
 私の卓球 整骨院 気管支炎 「健康格差社会」 ヨガ 卓球でのつきあい 「自然死への道」
 卓球話 (14回連載) 体組成計 「胆のう さようなら」物語 健康寿命 私の散策路 ハーブ療法
 養生論 難聴

- 330 補聴器 体幹トレーニング 南城卓球60代優勝 沖縄ハーブ健康法 姿勢矯正 pm2.5
アロエ鼻うがい 健康・病についての私の考えとつきあい(連載16回) 沖縄県教職員卓球大会70代優勝
低血圧と日本茶 私の身体手入れ(13回連載) 私とスポーツ(10回連載) 卓球(連載7回)
喘息 良すぎる体調
- 308 フ 出会い・集い 2007～2015年 2016年
- 309 フ 健康・身体・スポーツ 2003～2013年 2016年
- 312 フ 日常生活 2010～2016年 2017年
- 313 フ 続日常生活 食・住・エコロジー・老・近隣 2010～2016年 2017年
- 330 フ 健康・スポーツ・身体 2014～2019年 2019年

13) 人生創造論II (2013年～)

331、332が示す、この時期からの人生創造論は、人生後半期とくに老年期のものが増えていく。331の主な記事を並べておこう。

人生後半期の私流の人生創造(2回連載)

人生後半期の生き方(11回連載)

徒然草から学ぶ清水義範「50代から上手に生きる人ムダに生きる人」を読む(3回連載)

乾彰夫編「高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか」を読む(3回連載)

竹内常一・佐藤洋作編「教育と福祉の会おうところ」を読む(3回連載)

阿部真大「地方にこもる若者たち」を読む(7回連載)

「生き方を変える・創る」(56回連載)

五木寛之「新老人の思想」を読む(3回連載)

礪川全次「日本人はいつから働きすぎになったのか <勤勉>の誕生」を読む(3回連載)

見てわかるように、連載物が増えていくが、この時期は、刺激を受けた著作へのコメントの形が多い。それでも、「生き方を変える・創る」(56回連載)のように、長期連載となるオリジナルな執筆が増えはじめる。

331を継ぐのは332であり、連載がますます増え、大部分を占めるようになっていく。そして、著作へのコメントもあるが、私自身のオリジナルな執筆が多くを占めるようになる。

332の主な記事を、連載したオリジナルなものに限定して並べておこう。

点数序列からの卒業を(9回連載)

愉快的70歳の日々(6回連載)

私流・人間関係スタイル(21回連載)

個人ドラマとしての人生構図と老(7回連載)

人間関係(7回連載)

人生構図（15回連載）
 第二次人間関係（11回連載）
 連載新々人生（10回連載）
 老年期に思うこと（7回連載）
 読者と創る人生後半期の人生創造物語（10回連載）
 人生後半期突入期の激動への対応（5回連載）
 都会と田舎（6回連載）
 高齢期の生きがい（15回連載）

335 は、私自身の人生物語の冒頭の一冊目になるものだ。何年もかかるだろうが、2冊目、3冊目を作り上げたいと思っている。335 のサブタイトルは「チャレンジ精神とガンバリズムで、人生「上り坂」を駆ける」であるが、その通りの、25～45歳の物語だ。章立てを紹介しておこう。

- I 第一次沖縄生活スタート
- II 長男の死 現場教師たちとの共同追求
- III 猛然と打ち込む 大学教育 沖縄教育
- IV 東京での研究生活
- V 80年代後半の生活 集団づくりの新しい展開
- VI 愛知への転勤 大学授業

331 フ	生き方・人生	2013～2015年	2019年
332 フ	人生・生き方	2016～2019年	2020年
335 フ	私の人生1	1972～1992年	2020年

14) 沖縄論Ⅱ（2012年～）

2004年に始めた第二次沖縄生活も、1972～1990年の第一次沖縄生活よりも長くなっていく。地域での生活にすっかりなじみ、「近くの道を歩けば、知り合いに会う」といえるほどだ。そして、この期間、私の研究世界の多くが沖縄で占める。

2000年代後半には、沖縄についての学習と小文執筆を積み重ねてきたが、ブログに掲載したそれらの分野ごとの集約が283,285,288,290,325,327,328の7点であり、これらを「沖縄論シリーズ」としている。これらの主内容を項目例提示で紹介しておこう。

- 283 沖縄についてのステロタイプの認識 「沖縄先住民」問題 多田治「沖縄イメージを旅する」を読む
 村上呂里諸論 バイリンガル 沖縄国際大学米軍ヘリ墜落 『教科書検定』県民集会 沖縄農業
 吉本哲郎『地元学を始めよう』 『観光と有機農業の里・阿智』
- 285 戦後沖縄の人口 日本の貧困率・沖縄の場合 山城千秋『沖縄のシマ社会と青年会活動』
 沖縄の字公民館研究報告書 『おきなわの社会教育』 矢野輝雄『沖縄芸能史話』

- 288 西原町史執筆 石川市史を読む 南城市史総合版を読む 高宮廣土「島の先史学」を読む
吉成直樹『琉球の成立』を読む 久米島文化財めぐりツアー 上里隆史『琉球古道』を読む
『沖縄県史近代』を読む 屋嘉比収『＜近代沖縄＞の知識人』を読む
小林茂子『沖縄・フィリピン移民教育史』を読む 与那国暹『米軍支配と大衆支配のダイナミズム』を読む
沖縄と神々 外間守善『海を渡る神々』を読む 仲松弥秀「神と村」を読む
- 290 『沖縄子ども白書』を読む（4回連載） 野本三吉『沖縄・戦後子ども史』を読む（9回連載）
部活・学力・遊び（4回連載） 各地の学童保育クラブ訪問 沖縄工業定時制
沖縄起こし・世界起こし・人生おこしの学力 学校でウチナーグチを教える 私の新刊本（270）への反応
沖縄教育論（9回連載 「沖縄教育は、発展途上国型か先進国型か沖縄独自型か」など）
沖縄教育史時代区分への仮説

先に示した270は、この時期の中間点にあたるが、私なりの沖縄教育論である。

追加1は、文献リストアップの際に漏らして、後から追加したものだ。311にも掲載した記事だが、2015年12月名城大学で開催された九州教育学会第67回大会の「地域と大学を考える」シンポジウムで提案を行った。それを文章化し同学会の紀要に掲載したもので、2010年代前半までの沖縄の地域の教育について総括的に述べたものだ。補論として、私の大学教育実践にも触れた。

310は、沖縄文化史にとって大きな足跡を残した川平朝申について、若手研究者とともに共同研究した報告書に掲載したものである。

325の主な記事を示しておこう。

- 比嘉理麻「沖縄の人とブタ」を読む 波平恒男「近代東アジア史のなかの琉球併合」を読む（5回連載）
比嘉政夫「沖縄の親族・信仰・祭祀」を読む（3回連載） 安里嗣淳「先史時代の沖縄」（3回連載）
古家信平ほか「日本の民俗12 南島の暮らし」を読む（3回連載） 沖縄音楽教育史（22回連載）
久万田晋「沖縄の民俗芸能論」（8回連載） 上里隆史「海の王国・琉球」を読む（6回連載）

このなかの沖縄音楽教育史は、先述の沖縄県立芸術大学大学院博士課程対象の授業を担当した際に作成した準備小論集である。全く想定外の担当であったが、受講生だけでなく何人かの専門分野の方々が集まるものとなったので、楽しく充実した授業となった。

以上のような沖縄についての思考をまとめあげたのが、326である。出版社から発刊した単行本としては13冊目になる。沖縄関係本としては5冊目だ。沖縄と出会い、生活を送ってきた50年近くの思考の総集編といえるかもしれない。沖縄総体としてだけでなく、私自身のアイデンティティとして、沖縄・沖縄的・沖縄らしさ・沖縄特性をどうとらえるかをめぐって展開してきた思考の集約といえよう。

第一章 沖縄とは

第二章 沖縄・沖縄的の歴史スケッチ

第三章 沖縄・沖縄的を見る眼を再考する

第四章 多様な分野での沖縄・沖縄的

第五章 外部支配と沖縄・沖縄的 沖縄脱出と沖縄独自

第六章 沖縄・沖縄的の現在とこれから

2010年代には、関心対象を教育に限定せず多様な分野について追究していく。その際、よく見られる政治経済に焦点をあてるよりも、人々の生活や文化に焦点を当てるが多くなっていく。

327は、産業経済、政治、生活 集落 自然・環境 芸能の章立てで編集してある。主な記事を紹介しておこう。

沖縄県中小企業家同友会大学 沖縄独自の農業の追求へ 産業まつり 「沖縄の内発的発展」本を読む
富川盛武「沖縄の発展とソフトパワー」を読む(4回連載) 宮本憲一ほか「沖縄論」を読む(5回連載)
県民集会 県知事選挙 沖縄州構想 「100の指標からみた沖縄」(2015年3回連載 2012年5回連載)
沖縄の長寿問題 沖縄の集落(16回連載)

このなかの「沖縄の集落」連載は、第一次(2015~2016年)を後掲の315、第二次(2016~2017年)をこの327に掲載した。集落に焦点を当てた南城市史民俗編を執筆する前に、予習的な意味で執筆掲載したものである

328は、「沖縄的なもの」21回連載、「沖縄的なもの」第二次19回連載、「魅せる沖縄」をめぐる20回連載が中心で、いずれも、326の執筆と並行して書いたものである。他に、2010年代前半に書いた20点ほどの小論をおさめてある。

336は、2013~2019年に書いた20点余りの「沖縄の教育」についての小論、2017~2020年に書いた「学童クラブ」についての小論(「沖縄の学童保育クラブ」7回連載)を含むが、掲載の主要部を占めるのは、次の連載である。

南城市こどものまち宣言策定 2019~2020年 37回連載

沖縄の子どもをめぐる福祉・教育・行政の取組み 2020年 31回連載

いずれも、多様で豊かな沖縄の子ども・教育・福祉をめぐる構図を、私なりに整理しておこうという意図のもとに書いたものである。なお、「学童クラブ」についての小論だが、2010年代、とくにその後半に学童クラブ支援員対象の研修講師として沖縄各地をまわり、数十回にわたるワークショップを展開したが、そこでの出会い・体験をもとに書いた多くを収めた。

このように、2010年代は、沖縄をめぐる、とくに「沖縄の子ども・教育・福祉」をめぐる、精力的に著作を蓄積していった時期になった。

337は、雑誌編集部からの依頼で書いたものである。

283フ 沖縄論シリーズ1 沖縄 2003~2010年 2013年

285フ 沖縄論シリーズ2 生活・集落・文化芸能・自然 2006~2010年 2013年

288フ 沖縄論シリーズ3 沖縄の歴史・民俗 2003~2013年 2013年

290フ 沖縄論シリーズ4 沖縄の子ども・教育 2003~2013年 2013年

追加1 沖縄における地域と教育 『九州教育学会紀要』第43巻 2015年

310 「沖縄的なもの」と川平朝申 科学研究費報告書「川平朝申のライフコースを基軸とした戦前から戦後沖縄の教育・文化実践史研究」代表者斎木喜美子 2017年

325フ 沖縄論シリーズ5. 沖縄の歴史・民俗 2013~17年 2018年

326 魅せる沖縄—私の沖縄論— 高文研 2018年

327フ 沖縄論シリーズ6. 沖縄の経済 政治 生活 集落 自然・環境 芸能 2010~18年 2019年

328フ 沖縄論シリーズ7. 沖縄論 2010~2019年 2019年

- 336 フ 沖縄の子ども・教育・福祉 2013～2020年 2020年
 337 コロナ禍をきっかけに沖縄の教育を考える 『越境広場』第8号 印刷中 (2021年刊行予定)

15) 南城論 (2007年～)

南城市で、私は南城市文化センター・シュガーホール運営審議会、尚巴志活用マスタープラン検討委員会、南城市観光コア施設整備基本構想検討委員会、観光振興審議会、南城市史調査委員会など、諸委員会の会長・委員長を務めることが10年以上続く。303は、そんな私のありようの2014年段階のものを学会発表し、地域起こしについて論じたものだ。

274は、私流の南城ガイドブックとでもいえそうなもので、写真とコメントが中心である。

315は、南城をめぐる書いた小論集である。市の委員などに任せられると、そのテーマにかかわる「予習」をして、私なりの考えをまとめ、ブログ掲載して、委員会にのぞむことを通例とした。315の主内容は以下の通りである。

- 南城論 「南城を歩く・暮らす」新南城物語 (21回連載) 南城論への準備 (5回連載)
- 観光 私の「南城市観光コア施設」学習ノート」 (23回連載)
- 尚巴志マスタープラン
- シュガーホール
- 集落 沖縄の集落についてのミニメモ (15回連載)
- 市史
- 学童保育・保育園

316は、274を継ぐもので、この時期、趣味として、2014年末から半年かけて南城市全域を歩いたことをはじめ、市内各地のお出かけ体験をもとにしている。中心は、半年の散策記録「南城散策」(28回連載)であり、全体として、写真集に近い。

333は、南城市がすすめている南城市史民俗編の仕事である。数百人にもものぼる市民から20名近くの調査員が行った聞き取り記録、さらに字誌・記念誌などに記録されている膨大な史料をもとに、執筆作業を展開した。私は4つの集落についての各論編と、全体を見渡して書く総論編を担当した。これらの仕事を合わせると、単行本1～2冊執筆の相当するもので、2010年代後半はこの仕事にかなりのエネルギーを注いだ。聞き取りは戦前戦中戦後を通しての各集落での人々の暮らしのありようを豊かに含んでいる。私自身にとってだけでなく、南城市にとっても、さらに沖縄全体にとっても、貴重な財産になりそうである。

- 274 フ 南城物語 1 聖地・名所 2. 芸能・工芸・芸術 3. カフェ・レストラン・宿泊施設
 4. 暮らす 5. 盛り上げる 2012年
- 303 地域起こしと人生創造 生活指導学会発表 2014年
- 315 フ 南城 (南城論・観光・尚巴志マスタープラン・シュガーホール・集落・市史・学童保育・保育園) 2013～
 2017年 2018年
- 316 フ 南城を歩き景観を楽しむ 2012～2015年 2018年

- 333 南城市史「民俗編」 2020 年末現在、担当事務局で制作中。2022 年 3 月発刊予定 以下は浅野誠執筆担当箇所
 各論 糸数・中山・喜良原・百名団地の集落
 総論 「市民の語りで描く南城の多彩な集落（シマ）の歴史」（仮題）

16) 自然（2007年～）

2004 年からの沖縄暮らし、しかも「田舎暮らし」、つまり自然のなかの暮らしがかなりの期間になった。2007 年に前出の 255 を発刊した後、時がたつにつれ、自然景観だけでなく庭畑作業の生活になじみ、そこに棲み出入りする動物植物たちとも相当に親しくなった。動植物の名前もかなりわかるようになってきた。当初は出会いが新鮮で、発見の連続だったが、その後、その暮らしがまさに「自然の流れ」になってきた。

その中で、出会いをカメラにも収めるようになってきた。そんな出会いを電子出版として出したのが 271 だ。しかし、売れ行きは、限りなくゼロだ。だったら、自家本としてホームページに掲載し、フリー（無料）でみてもらおうという気持ちになり、ファイル化していったのが、下記掲載の 278 以下である。

動植物と書いたが、植物とのつきあいが圧倒的に多い。庭畑も年ごとに植種が変化していく。野菜・薬草・ハーブはそれなりに継続するが、周りの木々の樹高が高くなるにつれて日陰が増え、野菜などは 3 階ベランダが主な場所となる。果樹が大きくなったことも一因だが、移住当初頂いた植物を露地植えたものが大きくなってきたこともある、こうしてわが庭畑は果樹園・観葉植物園化してきた。

それにしても、2000 年代後半～2010 年代前半は夢中になって庭畑仕事をしていた。カメラ撮影も、毎日のようにたくさん撮影していた。ということで、ブログ記事の半分は、こうした類が占め、ファイル化したものが多くなったのだ。

314 は、以下に示すような項目で、私の生活を取り巻く自然について、まとめて一冊にした。目次は次のようになっている。

空・天体・景観 海・海岸 気候と災害 動物 植物・森 書籍

318～322 は、278～291 の後継となるものだが、植物種類ごとではなく、「我が庭畑」について年次順に編集した。

- | | | | | | | |
|-----|-----|-----------|-------------------|-----------|-------------|--------|
| 271 | 写真集 | 沖縄田舎暮らし | 自然につつまれて | 発売 Nansei | 2012 年 | 電子出版 |
| 278 | フ | 動植物シリーズ 1 | 我が家のハーブ | | 2012 年 | |
| 280 | フ | 動植物シリーズ 2 | 我が家の樹木・草・花・観葉植物 | | 2012 年 | |
| 282 | フ | 動植物シリーズ 3 | 我が家の畑庭作業と野菜 | | 2007～2010 年 | 2013 年 |
| 287 | フ | 動植物シリーズ 4 | 我が家の薬草 | | 2013 年 | |
| 289 | フ | 動植物シリーズ 5 | 我が家周辺の動物たち | | 2013 年 | |
| 291 | フ | 動植物シリーズ 6 | 我が家の畑庭の果樹 | | 2007～2013 年 | 2013 年 |
| 314 | フ | 自然 | 2010～2017 年 | | 2017 年 | |
| 318 | フ | 我が庭畑 | 2011～2012 年 | | 2018 年 | |
| 319 | フ | 我が庭畑 | 2013 年前半 | | 2018 年 | |
| 320 | フ | 我が庭畑 | 2013 年後半 | | 2018 年 | |
| 321 | フ | 我が庭畑 | 2014 年・1～8 月 | | 2018 年 | |
| 322 | フ | 我が庭畑 | 2014 年・9～15 年 7 月 | | 2018 年 | |